2024年9月22日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

葛藤の果ての救い

［創世記45章1～15節］

ヨセフは、そばで仕えている者の前で、もはや平静を装っていることができなくなり、「みんな、ここから出て行ってくれ」と叫んだ。だれもそばにいなくなってから、ヨセフは兄弟たちに自分の身を明かした。ヨセフは、声をあげて泣いたので、エジプト人はそれを聞き、ファラオの宮廷にも伝わった。ヨセフは、兄弟たちに言った。「わたしはヨセフです。お父さんはまだ生きておられますか。」兄弟たちはヨセフの前で驚きのあまり、答えることができなかった。ヨセフは兄弟たちに言った。「どうか、もっと近寄ってください。」兄弟たちがそばへ近づくと、ヨセフはまた言った。「わたしはあなたたちがエジプトへ売った弟のヨセフです。しかし、今は、わたしをここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです。この二年の間、世界中に飢饉が襲っていますが、まだこれから五年間は、耕すこともなく、収穫もないでしょう。神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのは、この国にあなたたちの残りの者を与え、あなたたちを生き永らえさせて、大いなる救いに至らせるためです。わたしをここへ遣わしたのは、あなたたちではなく、神です。神がわたしをファラオの顧問、宮廷全体の主、エジプト全国を治める者としてくださったのです。急いで父上のもとへ帰って、伝えてください。『息子のヨセフがこう言っています。神が、わたしを全エジプトの主としてくださいました。ためらわずに、わたしのところへおいでください。そして、ゴシェンの地域に住んでください。そうすればあなたも、息子も孫も、羊や牛の群れも、そのほかすべてのものも、わたしの近くで暮らすことができます。そこでのお世話は、わたしがお引き受けいたします。まだ五年間は飢饉が続くのですから、父上も家族も、そのほかすべてのものも、困ることのないようになさらなければいけません。』さあ、お兄さんたちも、弟のベニヤミンも、自分の目で見てください。ほかならぬわたしがあなたたちに言っているのです。エジプトでわたしが受けているすべての栄誉と、あなたたちが見たすべてのことを父上に話してください。そして、急いで父上をここへ連れて来てください。」ヨセフは、弟ベニヤミンの首を抱いて泣いた。ベニヤミンもヨセフの首を抱いて泣いた。ヨセフは兄弟たち皆に口づけし、彼らを抱いて泣いた。その後、兄弟たちはヨセフと語り合った。

[1] ヨセフと兄弟たちとの再会に至るまで

　最近こんなことを思います。人間が「心」を持っているということは、もちろん素晴らしいことだと思うことですけれども、「今の気持ち」と言う時、その「今」が「過去」を引き摺ってしまっているということが案外多いのではないかということを。つまり、過去の嫌な出来事や辛かったことが、「過去」で終わらずに「現在」化するということです。これは多分人間ならではのことなのだろうなと思います。動物たちに、「あなた、過去を引き摺っているでしょ？」ということはないのではないでしょうか。

今日の聖書箇所は、創世記の「ヨセフ物語」の、いよいよほとんど最後のクライマックスの部分になりますけれども、ヨセフ自身もそうですし、エジプトでヨセフに会った兄弟たちも、あるかなり昔の出来事によって、「今」というものを形作っている。そのように過去に囚われているということが見えてきます。

創世記41章のヨセフの言葉の通り、エジプトには7年の豊作の後、7年の飢饉が襲いましたが、エジプトはヨセフの言葉に従って豊作の時に多くの備蓄をしましたので酷いことにはなりませんでしたが、備蓄出来ずにいた周辺国は大変なことになり、多くの者たちがエジプトに食料・穀物を懇願して、ヨセフの許を訪ねてきました。そして、カナンの地に居るヨセフの父親ヤコブ（イスラエル）も、エジプトに息子たちを、穀物を買って来るように送り出したのです。それが42章の前半に書かれています。はるばるやって来たヨセフの兄たちは、エジプトの宰相になっていたヨセフの前にひれ伏してお願いする訳です。驚いたのはヨセフの方です。今、目の前にいる者たちが自分を売り飛ばした兄たちだとすぐに分かったからです。兄たちは、立派になったヨセフのことが本人だと分かりません。…まあ、ここから色々なことが起こります。ヨセフは彼らに穀物を与えることをしましたが、しかしあなた方の一番下の弟を連れてくることを命じて、それが叶うまではあなた方の一人を監禁すると言って、シメオンがそれまで人質になったこと、43章には、父ヤコブはとても苦しい思いをしたのですが、一番下の弟ベニヤミンを連れて兄弟が再びエジプトを訪ねたこと、捕らわれていたシメオンは解放され、その時にヨセフは兄たちやベニヤミンと共に食事までしてもてなしたことが書いてあります。そしてその後、44章になると、しかし、ヨセフがその持ち帰る荷物の中にエジプトの銀の杯をこっそりとベニヤミンの荷物に入れ込み、愛するベニヤミンに罪をなすりつけることで彼を傍に留め置くことを企てたのです。けれども思いがけず、兄の一人であるユダが、それだけは勘弁して下さい、私たちの年老いた父（ヤコブ）は、そんなことになったら、彼のすぐ上の兄（ヨセフのこと）も既に失っているので、父の悲しみは大きくなるだけでそれは出来ないのです、その代わりにこの私ユダがあなたの奴隷になりますから、と丁寧に懇願したのです。43：33～34にこうあります。

「何とぞ、この子の代わりに、この僕を御主君の奴隷としてここに残し、この子はほかの兄弟たちと一緒に帰らせてください。この子を一緒に連れずに、どうしてわたしは父のもとへ帰ることができましょう。父に襲いかかる苦悶を見るに忍びません。」

その言葉に促され、ヨセフも遂に兄弟たちに身を明かします。先ほど読んで頂いた45:1～3です。―「ヨセフは、そばで仕えている者の前で、もはや平静を装っていることができなくなり、「みんな、ここから出て行ってくれ」と叫んだ。だれもそばにいなくなってから、ヨセフは兄弟たちに自分の身を明かした。ヨセフは、声をあげて泣いたのでエジプト人はそれを聞き、ファラオの宮廷にも伝わった。ヨセフは、兄弟たちに言った。「わたしはヨセフです。お父さんはまだ生きておられますか。」兄弟たちはヨセフの前で驚きのあまり、答えることができなかった」。―グッとくる再会のシーンです。

[2]　 「大いなる救いに至らせるため」

私は今回準備をしていて、疑問に思ったことがあります。じれったいんですね。なぜ、ヨセフはなかなか自分の素性を兄弟に明かさなかったのかな？と。一つには、兄弟たちを試したという考え方があります。私はあなたがたに捨てられ、売り飛ばされてここにいるのだ、そのことをどこまで反省しているのか、それを見せて欲しいということです。きっとそういう点もあったと思います。けれどもヨセフは兄たちとの再会に心震え、秘かに泣いているんです。再会を喜んでいる、それは確かなことです。しかし、彼の心の中には大きな葛藤があったのではないでしょうか。それは「許したいけれど、許せない」という心です。これが人間ですね。人間は、過去の事が現在につながっていて、それが心の深い所で引き摺っているということ。それはヨセフだけでなく、ヨセフに罪を犯した兄弟たちも同じです。これは残酷な現実です。過去の事実は変えることが出来ませんから。しかも他者が原因であり、物理的にも遠く離れていたら、和解ということは一生起こらない可能性が高いですから。…しかし、本当に不思議ですね、世界的な飢饉が襲うことで、彼らがもう一度出会うということが起こったのですから。

ヨセフは兄弟たちを目の前にして、素性を明かしました。「私がヨセフです」（45:3）。これは重たい言葉です。この「わたしである」という文章の形式は、神ご自身が自らを宣言される時の言い方だと言われます。出エジプト記でモーセに現れた主が「わたしは在るというものである」と宣言されたり、主イエス様が、「わたしだ、恐れることはない」と言われた時の宣言と同じです。まぎれもなく、わたしであると。

創世記も、このヨセフの自己開示は、神様による一方的な憐み、赦しの宣言と捉えて良い言葉だと思います。事実、この4節以降のヨセフの言葉を見ると、ヨセフ自身が神様の出来事に震えていることが分かります。―「ヨセフは兄弟たちに言った。「どうか、もっと近寄ってください。」兄弟たちがそばへ近づくと、ヨセフはまた言った。「わたしはあなたたちがエジプトへ売った弟のヨセフです。しかし、今は、わたしをここへ売ったことを悔やんだり、責め合ったりする必要はありません。命を救うために、神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのです。この二年の間、世界中に飢饉が襲っていますが、まだこれから五年間は、耕すこともなく、収穫もないでしょう。神がわたしをあなたたちより先にお遣わしになったのは、この国にあなたたちの残りの者を与え、あなたたちを生き永らえさせて、大いなる救いに至らせるためです。わたしをここへ遣わしたのは、あなたたちではなく、神です」。

「大いなる救いに至らせるため」とヨセフは言いました。ヨセフの長年の本当に苦しかった葛藤があった。またこのベニヤミンをめぐる出来事の中でも揺れ動きが見えます。一方では、ちゃんと責任を取ってもらわねばいかないという正義感、一方では、抱き合いたいという愛や憐みの心。そして、ついに憐みの心がヨセフの中で上回ったのです。それが双方にとっての「大いなる救い」ではないでしょうか！ここにおいて「過去」が、単なる禍ではなくなったのです。過去からの金縛りが、不思議にも解けたのです。ヨセフの力の故ではないのですね。ヨセフは言いました。「わたしをここへ遣わしたのは、あなたたちではなく、神です」。そうなんです。私たちの人生の背後には、神様の促しとお働きがあるのです。それをヨセフは知った。また、兄弟たちもそれに与った。ですから、喜びの再会が出来たのです。

考えてみたら、イエス様がして下さったこともそういうことではないかと思います。本当ならば私たちは裁かれて然るべき者です。しかし、あのイエス様の葛藤の故に、心からの神への執り成しの故に、私たちはもう一度「神の子」として迎え入れられたのです！神様はイエス様を通して、私たちに言って下さっているのですね。「どうか、もっと近寄ってください」！（35章4節）。「わが許に来たれ」、イエス様から愛の招きです。赦しの招きです。ヨセフがしたことの中に、私たちは神様ご自身の、私たちに対する愛ゆえの葛藤と、それを通過されて差し出されている「救い」を見ることが出来ると思います。お祈り致します。

主よ、あなたの御名を讃美致します。私たちがあなたに愛されていることは奇跡です。当たり前のことではありません。しかし、十字架の愛を知らされた私たちは、ただ自分の頭だけで生きて行くのではなく、また頑なな心を抱いたまま生きて行くのでもなく、「心の貧しい者は幸いである」と言われた主に御足の跡をたどらせて下さい。どうかいつも主の愛を頂いて、あなたが愛されたように愛し、あなたが赦されたように人を赦して生きて行けますようにお導き下さい。私たちの力では出来ません。聖霊によってあなたにもっと近づくことが出来ますようにして下さい。。救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。